

[論文]

楽しい音楽の授業づくりのために

音楽が好きと音楽経験に関する一考察

山本 陽子

For a Better Designing of Music Class in Primary Schools

— A Consideration on Taste and Experience in Music —

Yoko YAMAMOTO

Most of students in the Child Education Faculty are expected to be teachers in primary schools. In the curriculum of the Faculty, classes on understanding music, teaching methods, practical expression and so on are offered for students' choice. Considering them as a future teacher on music, it may important that the students can learn essential of music both through performing and enjoying it, which is also stressed in the government's course guidance on music education. In the first class, new students try to recognize it by discussing in the classroom. In a practical manner, because of limited classes offered and limited their time, it is not so easy for the students to take classes on an appropriate balance between and among wider requirements.

According to a simple survey to the students of the Keiai University, likes and dislikes strongly correlated to one's experience on music. It means that performing, participating and enjoying music is important when the music class is designed for primary pupils. The future teachers in the Faculty would

learn it through their experiences in their campus lives.

はじめに

小学校の音楽の授業は何を目指しているのか？

「音楽って何だろう？」から「音楽」⁽¹⁾の授業は始まる。学生が思い浮かべる音楽は iPod やスマートフォンで日常聞いている音楽で、「あなたにとって音楽はどんな存在ですか？」という問いに対して、「日常生活に欠かせないもの」「NO MUSIC NO LIFE」などと答える学生が数年前までは多かった。最近はそのように音楽と自分との関わりが濃厚であると回答する学生は少なくなってきたように思われる。音楽は「息抜き」や「娯楽」であるという答えも数は多くないがある。「暇つぶし」という答えを見たときは少なからずショックを受けた。

音楽の発生には諸説あるが、私は人が人間として誕生した時からすでに存在していたと考えている。人間が他の動物と異なって進化してきた要因は「火の使用」にあるといわれている。また言語の使用も人間の特徴である。音楽は人間にとって、この言語と同等かそれ以上の意味があるのではないかと考える。言語は人間の思考に欠かせないものであり、音楽は言語に表せない思いや感情を表すものではないか。そして言語も音楽も人とつながり、共有するためのコミュニケーションの大切な方法であり、社会生活を営む人間にとって欠かすことのできないものである。このように学生が原始の昔を想像し、音楽は人間の生存にとって切っても切り離せない存在であることに気づくよう、初回の「音楽」の授業で導く。

「言葉は好きですか？」などと質問されることはない。言葉に対して好き嫌いを思う人はまずいないだろうし、言葉なしでは生きていけない。本来音楽も言葉と同様に嫌いな人はいないはずである。もし音楽が嫌いという人がいたら、それは周りの大人たち、保護者や教師の言動によってつくられたといえるであろう。「音が違う」「そんな声変!」「できない

じゃないの」などのように言われたり、叱責されたりしたことで、音楽をすることに臆病になったり、音楽が嫌いになったりしたことやこれまでに音楽の楽しさを感じる体験の機会が十分になかったことが考えられる。

最初の問いにもどる。小学校の音楽の授業は何を目指しているのか？

それは言葉でも理屈でもなく直接心に響く数多くの音楽体験をして、音楽の楽しさを感じることである。特に低学年では、その発達段階から何かをできるようにするとか、わからせるといったことではなく、音楽そのものの楽しさや喜びを全身で体感することが大切である。この時期に音楽の楽しさを感じる体験は、音楽を好きになってさまざまな音楽活動に積極的に参加しようという意欲につながる。友達と一緒に音楽をすることが喜びになり、音楽に関心をもって自分なりの思いで工夫して表現したり、多様な音楽のよさやすばらしさを求めたりするようになるであろう。そしてそのことが一生音楽を友として心豊かに生涯を送ることに結びつく。

「音楽」「初等音楽科指導法」の授業を通して、これらのことを体感することが、小学校で音楽の授業をする立場になろうとする学生自身にとって欠かせない。楽しい音楽授業は、指導者がねらいをしっかりとつこと、その活動や楽曲を児童と一緒に楽しんで行うこと、指導者自身が楽しいと感ずることで初めて成立する。

本論は、楽しい音楽授業づくりには、指導者が「音楽は楽しい」、「音楽が好き」という気持ちをもつことが大切で、その気持ちはさまざまな音楽に触れ、直接音楽をする体験の積み重ねから生まれるということを考察する。大学で実践している授業とその授業後の学生の意識調査をまとめ、分析・考察しようとするものである。

1. 小学校音楽科の目標

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う（下線筆者）

これが、学習指導要領の小学校音楽の目標である。この目標の下線を引いたところを穴埋め問題にして「初等音楽科指導法」の初回の授業で学生に問う。「○○及び○○の活動を通して」の○○に当てはまる2つの活動を考える。音楽の授業で行う活動にはどのようなものがあるか、自分の受けた音楽授業の体験を思い出して2つペアになる活動を考える。初めは「合唱と合奏」「歌と演奏」のように考える学生が多い。合唱は2つ以上のパートに分かれてみんなで歌うこと、リコーダーを吹くことは合奏とはいわない……。音楽活動は歌ったり楽器を演奏したりすることだけですか？と問いかけ「鑑賞」という言葉を引き出す。2つの活動の後半にはこの「鑑賞」が入るので、前半はこの「鑑賞」と対になる言葉を探す。歌ったり、演奏したり、踊ったりすることを合わせて何というかについていろいろ出し合うなかで、「表現」という言葉を学生から導く。

音楽活動は「表現」と「鑑賞」の活動が車の両輪のようになって成り立つ。音楽というどうしても表現に目が行きがちだが、鑑賞、聴くことは大切で、よく聴くことで音楽を感じ、表現をより豊かに深めていくことができる。

音楽科の目標は、抽象的な表現ではあるが、「音楽を愛好する心情」や「音楽に対する感性」を育て、「音楽活動の基礎的な能力」を培い、「豊かな情操」を養うことであり、単に音楽の技術・技能の向上を目指すものではないことを確認する。

音楽科の目標を受けて、各学年の目標は、低・中・高学年の2学年まとめて設定されている。そのキーワードが、低学年は「楽しく」中学年

は「進んで」高学年は「創造的に」である。

長く勤務していた東京都公立小学校では音楽には専科採用があり、すべての学校に専科が配置され、全校もしくは中・高学年の授業を受け持つ。千葉県には、専科採用はないが音楽専科のいる学校もあるので、学級担任が音楽を担当する場合は多くは1～3年になるであろう。低学年の目標は「楽しく」である。「楽しい」と感じる活動と「音楽を愛好する心情（音楽が好き）」とは切り離すことができない。

2. 音楽の好きな子どもたち

学習指導要領を受けて「音楽の好きな子どもを育てる」というのが、音楽専科のときの東京都小学校音楽研究会^②の目標であった。学習指導要領には実際の学習活動や指導内容について詳細に記述されているが、「音楽っていいな!」「楽しい!」「もっとやりたい!」という気持ちを児童がもてるような授業展開をすることが基本である。そしてそのためには指導者自身が音楽のよさを感じ、それを児童に伝えたいという思いをもつことが欠かせない。

音楽科目の授業の初回には必ず学生に「音楽は好きですか?」という質問を含む事前調査を実施している。学生の実態や思いを把握し、事前授業での学生の反応や理解度を予想し、実態に即した授業を進めるためである。

「音楽は好きですか?」という質問に、「大好き」「好き」「ふつう」「嫌い」「大嫌い」の5つから選択して答える。必修の授業でも、通常7割前後が「大好き」を含めて「好き」と回答し、2～3割が「ふつう」と答える。「大嫌い」の回答はまずない。「嫌い」もごく少数で1割を超えることはない。学年、クラスによっては8割以上が「大好き」を含む「好き」で残りが「ふつう」というようにクラス全体が音楽好きなケースも、「大好き」を選ぶ学生がほとんどいないクラスもある。

授業をしていて反応がいいと感じるときは、この「好き」と回答した

学生が多く、なかなか話が伝わらないと思う授業では、「好き」の回答が少ない場合が多い。学生の多くが「音楽は好き」と回答しているが、そのほとんどは音楽を聞くだけで、実際に音楽活動をしている学生はそれほど多くはない。「大好き」と回答する学生の大半は、自分で音楽活動の経験をもっている。実際の授業をしながら感じる感覚と学生の実態は、事前調査からもかなりの程度予想することができる。

3. アンケート調査意図と内容

今回実施のアンケートは、2012年度に行ったものと同じで、「小学校教員養成課程における音楽について」である。どちらも「初等音楽科指導法」の15コマの授業終了後に実施した。

このアンケートでは、予備質問で学生の高校時代の芸術科目の履修状況、授業以外の音楽活動の経験、さらに音楽は得意か、好きかを問い、学生の音楽に対する意識を知り、指導に生かすこと。本質問では「音楽」「初等音楽科指導法」の2科目を1年間通して履修した後、学生が音楽や小学校の音楽の授業をどのようなものとらえたかを検証するものである。

「音楽」の授業の開始時には、学生は音楽という教科は技術・技能面での上手・下手やできる・できないが重視され、差がつきやすい教科であるという認識をもっている場合が多い。音楽の授業は他の教科の授業と違うと思いますか？」という質問に、特に違いを感じないと回答する学生が年々増えている。他の教科と同様にテストをして成績がつけられるから同じと回答する。

「音楽」の授業では、「音楽って何だろう？」から始め、音楽の発生や音楽と人間とのかかわりに気づき、西洋音楽の理論を学んだり、実際に歌を歌ったり、楽器を使ってグループで表現を工夫したり、箏や三線や和楽器を体験したりする。続く「初等音楽科指導法」では、音楽教育の歴史や音楽科の目標やその内容を学ぶことと合わせて、音楽を聴いたり、

映像資料を活用したり、教師役や児童役になって低学年の簡単な模擬授業をしたりする活動を行いながら、音楽の特性や音楽授業の目指すものを学生自身が実感をもって体験しながら学べるような授業を展開する。

以下アンケート調査項目を列挙する。

<予備質問>

- 1 高校時代芸術科目の履修状況について その科目と履修期間
- 2 音楽の授業以外の音楽活動の経験 活動内容と期間等
- 3 音楽は得意ですか？
- 4 音楽は好きですか？

3・4の質問についてはそれぞれ「はい」「いいえ」「どちらともいえない」の3つから1つを選択する。

<本質問>

- 1 小学校で音楽の授業をするときに指導者として必要だと思うものは何ですか？

ア 演奏技術 イ 歌唱力 ウ 音楽理論や知識

エ 音楽授業の内容理解 オ 指導計画や教材研究（指導案含）

カ 児童理解 キ 音楽が好きという気持ち ク その他（ ）

から複数回答で答える。

- 2 自分にあったらいい、あるいは自分にあると思う音楽の力はどんなものですか？
- 3 小学校の音楽の授業で、子どもたちに何を学んでほしいと思いますか？

1のク及び2、3は自由記述として実施。

4. アンケート調査回答の集計と分析

今回のアンケート対象は、こども学科4期生で、2016年2月「初等音楽科指導法」の定期試験終了時に実施した。回答者は試験受験者で、男女の人数は該当学年の人数とは異なる。同様の条件で実施した2013年の

こども学科1期生の調査結果も適宜取り上げ、比較資料とする（4期生は再履修者3名・科目等履修生1名、1期生は再履修者2名を含む）。

回答数と属性

	4期生	%	1期生	%
男子	47	74.6	36	59.0
女子	16	25.4	25	41.0
計	63	100.0	61	100.0

総数はほぼ同じであるが、男女比が大きく異なる。1期生は概ね3：2であるが、4期生は3：1と男子の割合が大きい。こども学科4期生は在籍数も男子の比率が一番高い。

<予備質問>

1 高校時代選択した芸術科目

科目	4期生	%	1期生	%
音楽	23	36.5	23	37.8
美術	13	20.5	17	27.9
書道	19	30.0	17	27.9
工芸	4	6.0	2	3.2
複数履修未記入他	4	6.0	2	3.2
計	63	100.0	61	100.0

4期生は音楽23名。1年間履修9名、2年間8名、3年間6名である。音楽の履修者は4期生、1期生とも4割弱と大きな差はない。

2 授業以外の音楽活動経験

	4期生	%	1期生	%
ある	28	44.4	32	52.4
ない	35	55.6	29	47.6
計	63	100.0	61	100.0

4期生は1期生に比べて、授業以外の音楽活動の経験が少ない。実際の授業でも音楽の体験が極端に少ないと思われる学生が複数いた。楽器に触れた経験もほとんどないようであった。高校時代の音楽履修・授業以外の音楽経験の両方ない学生の割合が10%高い。

3 音楽は得意ですか？

	4期生	%	1期生	%
はい	13	20.6	10	16.4
どちらともいえない	22	33	28	45.9
いいえ	28	44.4	22	36
無回答	0	0	1	1.7
計	63	100	61	100

4期生は「はい」「いいえ」とも1期生より多い。音楽が得意な学生とそうでない学生の両方が多い。音楽に対する意欲や関心、経験に差があり、授業内容や目標の設定が難しい。「いいえ」の44.4%はかなり高い。

4 音楽は好きですか？

	4期生	%	1期生	%
はい	51	80.9	48	78.7
どちらともいえない	7	11.1	11	18
いいえ	5	8	1	1.6
無回答	0	0	1	1.7
計	63	100	61	100

4期生は、前問3の「音楽は得意ですか？」という質問には「いいえ」と回答した割合が高かったが、この「音楽は好きですか？」という質問では「はい」の回答が8割を超えている。授業はじめの調査では、5択で回答を求めているが、「嫌い」「大嫌い」と答えた学生はいない。音楽経験が少なく苦手意識をもっている学生が多いと思われる。

個別に集計した回答を高校時代の音楽授業履修と授業以外の音楽経験とクロスさせて「音楽が得意ですか?」「音楽は好きですか?」の回答を以下の4つに分類して検討する(表1)。

- (1) 音楽授業の履修がなく、授業以外の音楽活動の経験もない。

該当学生 28名(男子27名・女子1名)

- (2) 音楽授業を履修、授業以外の音楽活動の経験はない。

該当学生 7名(男子7名)

- (3) 音楽授業の履修はないが、授業以外の音楽活動の経験がある。

該当学生 12名(男子5名・女子7名)

- (4) 音楽授業を履修し、授業以外の音楽活動の経験もある。

該当学生 16名(男子8名・女子8名)

- (1) 音楽授業の履修がなく、授業以外の音楽活動の経験もないグループ

「音楽は得意ですか?」に「はい」と答えたのは3名の男子(10.6%)で、この3名とも音楽は「好き」と回答している。「音楽は得意ですか?」に「いいえ」と答えた18名(男子17名・女子1名)も12名(42.8%)が音楽は「好き」と回答、「どちらともいえない」が男子3名(10.6%)である。

「音楽は得意ですか?」で「どちらともいえない」と回答した7名のなかで、音楽は「好き」と5名(17.7%)が回答、「どちらともいえない」が2名(7.7%)であった。

「音楽は得意ですか?」では「はい」は3名だけだが、「音楽は好きですか?」に「はい」と回答したのは28名中20名(71.1%)である。得意ではないが、音楽は「好き」と回答した学生が多いといえよう。

- (2) 音楽授業を履修、授業以外の音楽活動の経験はないグループ

「音楽は得意ですか?」に「はい」と回答したのは1名(14.3%)のみで、「いいえ」は4名(57.1%)、「どちらともいえない」が2名(28.6%)であった。

表 1

	音楽履修	音楽経験	人数	音楽は得意ですか？		音楽は好きですか？		男女	%
(1)	なし	なし	28	はい	3	はい	3	男11	10.6
				いいえ	18	はい	12	男11 女 1	42.8
						いいえ	3	男 3	10.6
						どちらともいえない	3	男 3	10.6
			男27 女 1	どちらともいえない	7	はい	5	男 5	17.7
						どちらともいえない	2	男 2	7.7
(2)	あり	なし	7	はい	1	はい	1	男 1	14.3
				いいえ	4	はい	2	男 2	28.5
						いいえ	1	男 1	14.3
						どちらともいえない	1	男 1	14.3
			男 7 女 0	どちらともいえない	2	はい	1	男 1	14.3
						どちらともいえない	1	男 1	14.3
(3)	なし	あり	12	はい	2	はい	2	男 1 女 1	16.7
			男 5	いいえ	3	はい	3	男 2 女 1	25.0
			女 7	どちらともいえない	7	はい	7	男 2 女 5	58.3
(4)	あり	あり	16	はい	7	はい	7	男 2 女 5	43.8
				いいえ	3	はい	2	男 1 女 1	12.5
			男 8			いいえ	1	男 1	6.2
			女 8	どちらともいえない	6	はい	6	男 4 女 2	37.5
					63		63	男47 女16	

このグループで「音楽は好きですか？」に「はい」と回答したのは4名(57.1%)で、「どちらともいえない」2名(28.6%)、「いいえ」1名(14.3%)である。

(3) 音楽授業の履修はないが、授業以外の音楽活動の経験があるグループ

「音楽は得意ですか？」に2名(男子1名・女子1名)(16.7%)が「はい」と答え、音楽も好きと回答している。

「音楽は得意ですか？」に「いいえ」と答えた3名(男子2名・女子1名)(25%)、「どちらともいえない」7名(男子2名・女子5名)(58.3%)

も「音楽は好きですか？」には「はい」と答え、このグループは12名全員が音楽は好きと回答している。

(4) 音楽授業を履修し、授業以外の音楽活動の経験もあるグループ

「音楽は得意ですか？」に「はい」と答えたのは7名（男子2名・女子5名）（43.8%）、「いいえ」は3名（男子2名・女子1名）（18.7%）、そのうち男子1名（6.2%）が「音楽は好きですか？」に「いいえ」と回答している。

「音楽は得意ですか？」に「どちらともいえない」と答えた6名（男子4名・女子2名）（37.5%）も全員音楽は好きと回答。このグループの16名は1名だけ「音楽は好きですか？」に「いいえ」と回答しているが、この学生は高校で軽音のボーカル、大学ではアカペラと記述があり、「音楽が好きですか？」の「いいえ」は誤答ではないかと思われる。

以上から、「音楽は得意か」と「音楽は好きか」とはかなり強い関連があることがわかる。音楽が得意だと答えた学生は100%音楽は好きと回答し、反対に「音楽は好きですか？」に「いいえ」と答えた5名は全員、「音楽は得意ですか？」で「いいえ」と回答している。

音楽は得意ですか？		音楽は好きですか？		男女	%
はい	13	はい	13	男 7 女 6	100.0
いいえ	28	はい	19	男16 女 3	67.9
		いいえ	5	男 5	17.9
		どちらともいえない	4	男 4	14.2
どちらともいえない	22	はい	19	男12 女 7	86.4
		どちらともいえない	3	男 3	13.4

音楽は好きですか？		音楽は得意ですか？		男女	%
はい	51	はい	13	男 7 女 6	25.5
		いいえ	19	男16 女 3	37.25
		どちらともいえない	19	男12 女 7	37.25
いいえ	5	いいえ	5	男 5	100.0
どちらともいえない	7	いいえ	4	男 4	57.1
		どちらともいえない	3	男 3	42.9

高校時代の音楽授業の履修と音楽は好きかということには特に関連はみられない。高校時代の芸術科目の履修は、高校の事情により必ずしも本人の希望通りにならないケースもあり、履修しなかった学生の40名中12名は授業以外の音楽活動の経験があり、その12名すべてが音楽は好きと答えている。音楽が得意と答えたのは2名のみであるが、全員音楽は好きと回答している。これに対して音楽授業は履修したが、授業以外の音楽経験のない7名のうち、得意か好きかの両方の質問に「はい」答えたのは1名のみである。

音楽授業履修		音楽は好きですか？		男女	%
はい	23	はい	20	男12 女 8	87.0
		いいえ	1	男 1	4.3
		どちらともいえない	2	男 2	8.7
いいえ	40	はい	32	男24 女 8	80.0
		いいえ	3	男 3	7.5
		どちらともいえない	5	男 5	12.5

授業以外の音楽経験		音楽は好きですか？		男女	%
ある	28	はい	27	男12 女15	96.4
		いいえ	1	男 1	3.6
ない	35	はい	24	男23 女 1	68.6
		いいえ	4	男 4	11.4
		どちらともいえない	7	男 7	20.0

一方、授業以外の音楽経験は、音楽が好きとの関連が大きい。音楽経験があると答えた28名（男子13名・女子15名）では「音楽が好きですか？」に「はい」が27名（96.4%）「いいえ」が1名（男子）であるのに対して、授業以外の音楽経験のない35名（男子34名・女子1名）では「音楽が好きですか？」の「はい」は24名（68.6%）しかいない。

これらのことから、音楽が好きかどうかは、授業以外の音楽経験が大きく影響しているということが読み取れる。たまごとにわたりの関係のように、どちらが先なのか、音楽が好きだから授業以外の音楽活動をするのか、授業以外の音楽活動をする事で音楽が好きになるのかはいったん置いておく。

＜本質問＞

- 1 小学校の音楽の授業をするときに指導者として必要だと思うものは何ですか

「小学校の音楽の授業をするときに指導者として必要だと思うものは何ですか？」という問いに ア 演奏技術 イ 歌唱力 ウ 音楽理論や知識 エ 音楽授業の内容理解 オ 指導計画や教材研究（指導案含）カ 児童理解 キ 音楽が好きという気持ち ク その他（自由記述）を複数回答で○を付ける形で行った。

4期生（63名）

	人数	%	全体100	順位	
ア 演奏技術	13	20.6	6.2	6	
イ 歌唱力	9	14.3	4.3	7	
ウ 理論知識	20	31.7	9.6	5	
エ 授業内容理解	49	77.8	23.4	2	
オ 指導計画教材研究	33	52.4	15.8	4	
カ 児童理解	51	80.9	24.4	1	平均回答数
キ 音楽が好きという気持ち	34	54.0	16.3	3	3.32
	209		100.0		

その結果、全体では、＜カ 児童理解＞が最も多く 51 名 (80.9%) 次いで＜エ 音楽授業の内容理解＞49 名 (77.8%) ＜キ 音楽が好きという気持ち＞34 名 (54%) ＜オ 指導計画や教材研究 (指導案含)＞33 名 (52.4%) とほぼ同じで、以下＜ウ 音楽理論や知識＞20 名 (31.7%) ＜ア 演奏技術 13 名＞ (20.6%) ＜イ 歌唱力 9 名＞ (14.3%) と続く。

クの自由記述では＜音楽を楽しそうに表現する力＞＜楽しむ気持ち＞があった。

この結果を今度は「音楽は得意ですか？」に対して「いいえ」「どちらともいえない」と答え、かつ「音楽が好きですか？」に対して「いいえ」または「どちらともいえない」と回答した《音楽に対して多少苦手意識をもっていると思われるグループ A (該当学生 12 名)》

「音楽は得意ですか？」に対しては「いいえ」や「どちらともいえない」と答えているが「音楽は好きですか？」に対して「はい」と回答している《得意ではないが音楽は好きのグループ B (該当学生 38 名)》

「音楽は得意ですか？」で「はい」、「音楽は好きですか？」でも「はい」と回答した《音楽大好きなグループ C (該当学生 13 名)》に分けて、回答を集計してみると興味深い傾向がみられた。

グループ B は人数も多く、当然のことながら集計の結果は全体とあまり変わらない。

グループ A では、＜エ 音楽授業の内容理解＞を 12 名中 11 名 (91.7%)、＜カ 児童理解＞を 10 名 (83.3%) が挙げた。反対に＜ウ 音楽理論や知識＞は 2 名のみ (16.7%) で全体と比較すると半分ほどになっている。

グループ C では、＜ウ 音楽理論や知識＞が 13 名中 5 名 (38.5%) でグループ A (16.7%) と違う。＜キ 音楽が好きという気持ち＞も 8 名 (61.5%) で他のグループと傾向が異なる。人数に差があるため、全体を 100 とした割合で比較すると傾向が読み取りやすい。

これらのことから、音楽の経験が少ないため《音楽に対して多少苦手意識をもっていると思われるグループ A》の学生は、「初等音楽科指導法」の授業を通して、小学校の授業に対して新たな認識をもち、音楽の授業

グループA

得意か	好きか		人数	%	全体100	順位
いいえ 9	いいえ 5	ア 演奏技術	3	25.0	7.5	5
どちらともいえない		イ 歌唱力	2	16.7	5.0	6
3	12	ウ 理論知識	2	16.7	5.0	6
		エ 授業内容理解	11	91.7	27.5	1
		オ 指導計画教材研究	6	50.0	15.0	3
		カ 児童理解	10	83.3	25.0	2
		キ 音楽が好きという気持ち	6	50.0	15.0	3
			40		100.0	

グループB

得意か	好きか		人数	%	全体100	順位
いいえ 19	はい 38	ア 演奏技術	7	18.4	5.7	6
どちらともいえない		イ 歌唱力	5	13.2	4.1	7
3	12	ウ 理論知識	13	34.2	10.7	5
		エ 授業内容理解	28	73.7	22.9	2
		オ 指導計画教材研究	19	50.0	15.6	4
		カ 児童理解	30	78.9	24.6	1
		キ 音楽が好きという気持ち	20	52.6	16.4	3
			122		100.0	

グループC

得意か	好きか		人数	%	全体100	順位
はい 13	はい 13	ア 演奏技術	3	23.1	6.4	6
		イ 歌唱力	2	15.4	4.3	7
		ウ 理論知識	5	38.5	10.6	5
		エ 授業内容理解	10	76.9	21.3	2
		オ 指導計画教材研究	8	61.5	17.0	3
		カ 児童理解	11	84.6	23.4	1
		キ 音楽が好きという気持ち	8	61.5	17.0	3
			47		100.0	

内容をしっかり理解して授業をすることが大切であることに気づいたと考えられる。また苦手意識をもっていた実技面は小学校で授業を行う上

では必ずしも重視されることではないと少し安心したのではないだろうか。

《音楽大好きグループC》の音楽が得意な学生たちは、模擬授業などの活動のなかで、自分の思いだけでは授業が進められないこと、授業の主体である児童を想定することや児童理解の大切さ、実際の授業で指導者が児童の様子を見ながらピアノを弾いたり歌ったりすることが効果的であることを実感し、その力をつけていこうと考えたのではないかと思われる。

同じ授業を受けても、音楽経験の違いによって受け取り方が違うことが読み取れるが、それぞれの思いや力に応じて、自分なりの課題を見つけられたのではないかと考えられる。

(参考) 1期生との比較

授業をするときに指導者として必要だと思うものについての回答は、4期生より1期生は1人当たりの選択回答数が平均ほぼ1つ多い。全体を100とした場合の回答の分布は<カ 児童理解>と<エ 音楽授業の内容理解>では4期生のほうが高いが、実際の回答数はほぼ変わらない。1期生は平均回答数が多い分 <ア 演奏技術><イ 歌唱力><ウ 音楽理論や知識><キ 音楽が好きという気持ち>の数が多いといえる。1年間の「音楽」「初等音楽科指導法」の授業を通しての小学校の音楽授業に対する理解にほぼ違いはないといえるであろう。

1期生 (61名)

	人数	%	全体100	順位	
ア 演奏技術	23	37.7	8.8	6	
イ 歌唱力	19	31.1	7.3	7	
ウ 理論知識	34	55.7	13.0	5	
エ 授業内容理解	47	77.0	18.0	3	
オ 指導計画教材研究	38	62.3	14.6	4	
カ 児童理解	52	85.3	19.9	1	平均回答数
キ 音楽が好きという気持ち	48	78.7	18.4	2	
	261		100.0		4.28

2 自分にあつたらいい、あるいは自分にあると思う音楽の力はどんなものですか

自由記述で記入。前問例示のア～キまでの内容と重複するものとして<ア 演奏技術>12名、<イ 歌唱力>12名、<ウ 音楽理論や知識>6名、<エ 音楽授業の内容理解>3名、<カ 児童理解>2名、<キ 音楽が好きという気持ち>6名、がある。

例示以外のものでは、<ピアノが弾けるようになりたい(弾ける)>9名、<音感がほしい>5名、<絶対音感>2名、<表現力>4名、<リズム感>3名、<音楽を楽しむ力>3名、を複数が挙げた。

<いろいろな楽器が演奏できたらいい><伴奏は弾けたほうがいい><楽譜を読める力><指導力><まとめる力><児童の実力が理解できる力><音楽の深い知識><曲の感性を感じる力><センスのある展開力><音楽を愛する心><音楽を表現する心><仲間意識>……などの記述があった。

この回答を1期生と比較すると1期生の方がピアノ(15名)、演奏技術(25名)、歌唱力(19名)などいわゆる音楽技術や音楽能力についての記述が多い。創造性、アドリブ力、音楽を鑑賞する力など4期生では見られないものもある。全体に積極的に音楽に取り組みたいという雰囲気が感じられるのは、授業以外の音楽経験がある割合が高いこと、女子の割合が多いこととも関係しているのではないと思われる。

4期生は、音楽経験の少ないと思われる学生が多かったので、意図的に小学校の音楽授業では指導者の音楽が好きだという気持ち、子どもたちと一緒に音楽を楽しもうとする姿勢が何よりも大切であることを強調し、伴奏はいろいろなパターンで用意されているCDを効果的に使用することや無伴奏でも十分に授業できることを実践したこととも関係があるかもしれない。

3 小学校の音楽の授業で、子どもたちに何を学んでほしいと思いますか

自由記述。複数の内容を記述したものは、それぞれ別に集計している。

4期生も1期生も突出して多い回答が「音楽の楽しさ」(4期生43名・1期生47名)で、そのほかにも「楽しさ」「表現する」「気持ち」などの言葉が並ぶ。小学校の音楽科教育が指すものについて、1年間の授業を通してそれぞれが自分で感じたことや思いを素直に表現して記述した内容になっている。

4期生 (63名)

音楽の楽しさ	43
表現することの楽しさ	7
楽しいと感じる心 気持ち	6
表現しようとする気持ち力	3
楽しんで学び合うこと楽しみながら気づけること	1
いろいろな音楽があること たくさんの音楽に触れてほしい	2
さまざまな表現方法	1
音楽のすばらしさ	1
音楽のおもしろさ	1
音楽が好きという気持ち	3
音楽とはどういうものか	1
音楽には古い歴史がある	1
音楽の効果	1
演奏技術 基礎知識	1
音楽の基礎的な能力	1
それなりの知識	1
楽器での演奏	1
リズムや音の高低	1
技術もあるがそれより楽しく自分みたいに苦手だからやらないという児童をなくしたい	1
技術だけでなく豊かな感性や情操	1
仲間や友人と音楽を創る楽しさ	1
周りの人と協力すること	1
努力して音楽が完成したときの達成感	1
他人を気にしない心	1

1期生（61名）

音楽の楽しさ	47
歌うことの楽しさ	4
演奏することの楽しさ	4
表現力	3
コミュニケーション能力	3
いろいろな角度からみる音楽の楽しさ	1
音楽にある力強さ	1
音楽の美しさ	1
音楽のおもしろさ	1
音楽が好きという気持ち	5
生きていく中での音楽の重要性	1
音楽の喜び	1
豊かな表現力	1
音楽を感じ取る心	1
個性	2
自由さ	1
リズム感覚	1
他者理解	1
本当はすごく楽しい教科なはず	1
心から楽しんで活動できる	1
心を豊かにする なごむ	1
嫌いにならないでほしい	1
教え込むのではなく、楽しく感じる気持ち	1
体で表現	1
仲間との協力	1

5. 学生の音楽科目履修の現状

今春、こども学科になって2回目の卒業生を送り出す。こども学科2期生は入学者70名、男女ほぼ同数で、全体的な印象は地味であったが、音楽の好きな学生も、明るく素直にコツコツと真面目に取り組む学生も多く、教員採用試験では期待以上の結果を出し、それぞれの進路を歩み出す。

前身の国際学科地域こども教育専攻では、学生数は1学年30名前後、一番多かった学年でも50数名であったので、1年から4年までで140名は

どであった。現在のこども学科の在籍は2期生から5期生で300名に迫る。

担当している音楽関係科目は卒業必修科目の「音楽」（2年前期開講）と小学校教員免許取得必修科目の「初等音楽科指導法」（2年後期開講）、選択実技科目として「音楽と表現Ⅰ（合唱）」（1年以上履修可）「音楽と表現Ⅱ（リコーダー）」（2年以上履修可）「音楽と表現Ⅲ（ピアノ）」（2年以上履修可）と「世界の音楽」（2年以上履修可）である。

「音楽」と「初等音楽科指導法」では1学年50名を超える学年は2クラス編成で実施している。他教科も指導法では同じように2～3クラス編成で実施しているので、「〇〇科指導法」や「△△（教科名）」が複数開講されている。そのため、音楽に限らず、必修科目が多い1年次・2年次は選択科目の履修が難しい現状がある⁽³⁾。

こども学科は小学校教員免許を取得しなくとも卒業できるようになった。従来は全員が「音楽」と「初等音楽科指導法」を2年の前期・後期で継続して履修することを前提に授業を実施してきたが、2期生からは教員免許取得を希望しない学生（「音楽」のみ履修）のいる実態を考慮し、「音楽」の授業内容を毎年少しずつ修正しながら実施している⁽⁴⁾。

今回4期生の授業では、以前からの和楽器の実習に加えて、1クラスを3つに分けたアンサンブル活動を取り入れた。小学校の教科書教材を使用し、楽譜をそのまま演奏するのではなく、自分たちで楽器を選び工夫しながら音楽をつくっていく課題を出した。一人ひとりが役割を分担しながらグループで協力して一つの音楽をつくりあげる作業には時間がかかる。しかし、絶対的に音楽の直接体験が少なく音楽のよさを体感するチャンスがあまりなかった学生にとっては、じっくり楽器と触れ合ったり合わせる楽しさを体験したりする貴重な機会となった。また音楽経験の豊かな学生にとっては、さまざまな工夫をしたりみんなを一つにまとめる発展の活動として、音楽の難しさやおもしろさを感じることができた。そして互いに聴き合ってそのよさや違いを認め合うこともでき、学生の心に残るものになったようである。「音楽」の授業しか履修しない学生も、親や社会人になったときに、小学校の音楽科が何を目指してど

のような活動を行っているのかを知っておくことは意味があるであろう。

音楽関係の科目は現在一人で担当しているため、時間数も時間割の設定も限られてしまう。いまは時間割の重複から音楽実技科目を学生が履修することが難しくなっているが、学生の希望を叶えるには受け入れ態勢が十分とはいえない。実際、本年度後期「音楽と表現Ⅲ（ピアノ）」では音楽室の電子ピアノの数から設定している人数を超えた履修希望者が集まり、上学年の学生の履修を優先して2・3年生の履修を断った。また前期の「音楽と表現Ⅱ（リコーダー）」では、複数学年の必修科目と重なり、履修者が6名であった。このように、学生にとっても指導者にとっても、実技科目を適切な条件で実施することはなかなか難しい状況がある。しかし、実際に音楽を体験し音楽の楽しさを体感する機会として、できるだけ多くの学生たちに音楽実技科目の履修を奨励したい。

むすびに

変化の激しい社会にあって、教育の世界も大きく変化している。「生きる力」の考え方はかなり浸透してきたが、子どもに求められる「基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力」⁽⁵⁾は当然、教員にも期待され、学生も身に付けていかなければならない資質・能力である。

人はだれでも自分の経験からものを考え判断する。学生たちのものの見方をより豊かに多様にしていくことは大学時代の自由な時間にこそ可能なことで、特に小学校教員になろうというものにとっては大切なことである。「知識基盤社会」といわれる時代は、さらに幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断力が求められる。小学校の教員は各教科や教科外の活動のすべてで児童とかかわる、見識をもった信頼される専門職である。

小学校は最初の意図的・計画的に行われる公教育である。児童にとっ

てすべての体験が初めてであり、集団での学習に初めて取り組む。もちろん大半の子どもたちは小学校入学前に幼稚園や保育園に通い、集団で過ごしたり、運動したり、歌を歌ったりする経験はしているであろう。それでも初めてさまざまな体験や学習をする場である小学校の教員の役割・責任は重く、子どもの人生にも大きな影響を及ぼす。

今回は、楽しい音楽の授業づくりのためには、指導者が多様な音楽活動を経験し、音楽を好きになることが欠かせないということを実際の授業や学生の実態調査から論述した。小学校の教員になりたいと入学してくる子ども学科の学生たちが、4年間でどのような力を身につけることが大切なのかを常に考えている。学生たちが、将来を担う子どもたちの育成にかかわる教員として、現場に貢献しながら、自分自身をさらに伸ばしていくことができるかを、今後とも追究しながら、学生とともに歩んでいきたい。

(注)

- (1) 13カリ こども学科4期生までは卒業必修科目。基礎的な教養として音楽理論や音楽活動を行う2年次前期科目。後期開講の「初等音楽科指導法」と2科目履修で小学校教員免許取得のための音楽の単位となる。
- (2) 東京都小学校の音楽研究組織、都小音研。各区市町村の地区単位で研究主題を掲げ、授業研究、実技研修、教材研究などを行う一方で、地域を越えた自主的な研究グループもある。現在の都小音研研究主題は「つながる 深まる 音楽する喜び」である。
- (3) 「教職課程における音楽の学び——音楽の基礎力に関する一考察」『音楽学習研究』第7巻『2011年音楽学習学会』、97ページ参照。

地域こども教育専攻
1期生から4期生卒業までの
音楽実技選択科目の履修状況

	卒業者数	履修延べ人数(割合)
1期生	26人	34人(130%)
2期生	26人	37人(142%)
3期生	32人	53人(166%)
4期生	54人	109人(202%)

1期生・2期生の実技科目は「合唱」「器楽」の2科目で通年科目であった。3期生以降は半期科目で「音楽と表現Ⅰ(合唱)」「音楽と表現Ⅱ(リコーダー)」「音楽と表現Ⅲ(ピアノ)」の3科目になり、延べ人数が増えている。すべての科目が1年次から履修可能であった。

こども学科
1期生から4期生
音楽実技選択科目の履修状況

	学生数	履修延べ人数(割合)
1期生	61人	73人(120%)
2期生	59人	67人(113%)
3期生	64人	50人(78%)
4期生	69人	49人(71%)

こども学科の実技科目は「音楽と表現Ⅰ(合唱)」「音楽と表現Ⅱ(リコーダー)」「音楽と表現Ⅲ(ピアノ)」の半期科目3つ。「音楽と表現Ⅰ(合唱)」のみ1年次から履修可能。「音楽と表現Ⅱ・Ⅲ」は2年以上履修科目。

2期生は今春卒業。3・4期生は来年度以降も履修することが可能である。5期生は今年度時間割の関係から、「音楽と表現Ⅰ(合唱)」を履修することができなかった。

- (4) このことに関しては「楽しい音楽の授業づくりのために——国際学部小学校教職課程の8年」『敬愛大学国際研究』第28号、2015年2月、101ページ参照。
- (5) 現行学習指導要領は、「平成8年7月の中央教育審議会答申」（「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」）文部科学省「生きる力」。